

新約聖書と黙示文学・黙示思想 (研究フォーラム)

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原口, 尚彰 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24434 |

新約聖書と黙示文学・黙示思想*

原 口 尚 彰

1. 新約聖書における黙示文学と黙示思想¹

黙示文学 (Apocalypse) とは一つの特異な文学形式であり、旧約後期文書の一部(ゼカリヤ書, ダニエル書他)、中間時代のユダヤ教文書の一部(エチオピア語のエノク書, シリア語のバルク黙示録, 第4エズラ書, レビの遺訓, モーセの遺訓他)に展開されている。黙示文学は世の終わりに起こる不思議な出来事についての特別な黙示(啓示)を受けた著者が、それを物語の形で書き記すというスタイルを採る²。世の終わりという究極的未来における出来事は誰も見たことがないことなので、黙示文学は宗教的想像力を巡らして、天上の世界や終末時に地上で起きる出来事を視覚的に描くこととなる³。黙示文学の文学形式は新約文書の一部に

* 本稿は、2006年6月30日に行われた東北学院大学キリスト教文化研究所主催研究フォーラムで行った発題に加筆したものである。

1 拙著『新約聖書概説』教文館、2004年、177-179頁を参照。

2 黙示文学という文学ジャンルについての詳しい議論は、J.J. Collins, "Introduction: Towards the Morphology of a Genre," *Semeia* 14 (1979) 1-20; idem., "The Genre Apocalypse in Hellenistic Judaism," in *Apocalypticism* (ed. D. Hellholm; Tübingen: Mohr, 1983) 531-48; idem., *The Apocalyptic Imagination* (2nd ed.; Grand Rapids: Eerdmans, 1998) 2-11; idem., "Pseudonymity, Historical Reviews and the Genre of the Revelation of John," *CBQ* 39 (1977) 329-43; D.E. Aune, "The Apocalypse of John and the Problem of Genre," *Semeia* 36 (1986) 65-96; D. Hellholm, "The Problem of Apocalyptic Genre and the Apocalypse of John," *Semeia* 36 (1986) 13-64; H. Hoffmann, *Das Gesetz in der frühjüdischen Apokalyptik* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1999) 21-70; G.S. Oegema, *Zwischen Hoffnung und Gericht. Untersuchungen zur Rezeption der Apokalyptik im frühen Christentum und Judentum* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1999) 3-48を参照。

3 D.E. Aune, "Transformation of Apocalypticism in Early Christianity," in *Knowing the End from the Beginning: The Prophetic, the Apocalyptic and their Relationships* (eds. L.L. Grabbe & Robert D. Haak; London: T. & T. Clark, 2005) 56.

も、継承されている。文書全体が黙示文学の形式で書かれている新約文書は黙示録だけであるが、文書の一部に黙示的要素を含んだ例は、福音書文学（マルコ 13 章；マタイ 24 章；ルカ 21 章）にも、書簡文学（I コリ 15: 20-58；II コリ 12: 1-5；I テサ 4: 13-5: 11；II テサ 1: 3-12；2: 1-11；II ペト 3: 8-13 他）にも広く見られる。

黙示思想 (Apocalypticism) は黙示文学に属する諸文書に典型的に見られる思想であり、現在の世界が終わり、全く新しい世界が到来することを最も中心的な内容とする(二元論)⁴。古い世界と新しい世界の間には質的相違があり、現在の世界は悪と死の力に支配されて希望がないのに対して、新しい世界は正義といのちが支配する理想の世界であり、救いの希望の対象である。世の終わりをもたらすのはメシアであり、その時には死者が復活し、審判を受け、生前に悪を行った者は滅びへ、善を行った者は永遠の祝福へと定められる。こうした黙示思想は新約文書の随所に見られ、初期キリスト教の基本思想の一つとなっている⁵。

イエスの宣教の中核にある神の国の到来の思想（マタ 4: 17；5: 3；13: 31；マコ 1: 14-15；ルカ 6: 20；13: 18 他）は既に黙示的である⁶。イエスは終末的審判者として人の子が到来することについて語っている（マタ 10: 23；12: 40；マコ 8: 38）。初代教会は、殺されて三日目に甦

4 D.S. Russell, *The Method and Message of Jewish Apocalyptic* (Philadelphia: Westminster, 1964) 269; P.D. Hanson, *The Dawn of Apocalyptic* (Revised ed.; Philadelphia: Fortress, 1979) 432-433.

5 J. Marcus/M.L. Soards eds., *Apocalyptic and the New Testament* (FS. J.L. Martyn; JSNT Sup 24; Sheffield: JSOT, 1989); M. Becker/M. Öhler, *Apokalyptik als Herausforderung neutestamentlicher Theologie* (WUNT II. 214; Tübingen: Mohr, 2006) を参照。尚、E. Käsemann, "Die Anfänge christlicher Theologie," in idem., *Exegetische Versuche und Besinnungen* (2 vols; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1964) 2. 100 は、黙示思想を die Mutter aller christlichen Theologie (「あらゆるキリスト教神学の母」) と呼んでいる。

6 P. Vielhauer/G. Strecker, "Apokalyptik des Urchristentums," in *Neutestamentliche Apokryphen* (ed. W. Schneemelcher; 5. Aufl.; 2 vols; Tübingen: Mohr, 1989) 2. 516; F. Hahn, *Frühjüdische und urchristliche Apokalyptik. Eine Einführung* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1998) 93; M. C. de Boer, "Paul and Apocalyptic Eschatology," in *The Encyclopedia of Apocalypticism* (ed. J.J. Collins; 3 vols; New York: Continuum, 1998) 1. 348.

り、昇天したイエス・キリストを終末の審判者人の子と同定し、主の来臨を待ち望んだ（マタ 10: 23; 12: 41; 24: 29-31; 26: 64; マコ 13: 24-27; 14: 62; ルカ 22: 25-27; 22: 69）⁷。このような黙示的伝承は初代教会の預言者の活動によって形成され、広められたと推測される。

使徒パウロの思想は非常に黙示的である⁸。彼は主の来臨が近いことを確信し（ロマ 13: 11; I コリ 7: 29-31）、主が再び来られるときに、死者は復活すると信じていた（I コリ 15: 20-28; I テサ 4: 13-18）⁹。彼は他方、世の終わりが近いのだから、この世に深入りしないようにと信徒たちに勧めた（I コリ 7: 29-35）。他方、キリストの死と復活によって終末の時は既に始まっており、人類の始祖アダムの罪過によって世界に罪と死と罪とが入って来たが、第二のアダムであるイエス・キリストによって義と恵みといのちが入って来たという黙示文学に起源する二元論的思考がパウロには見られる（ロマ 5: 12-21; I コリ 15: 20-22, 42-49）¹⁰。

ユダヤ戦争の時のエルサレム陥落や神殿破壊の出来事（紀元 70 年）は、ユダヤ教徒やキリスト教徒に大きな衝撃を与え、一部の人々の黙示的思考を呼び覚まし、第 4 エズラ書やシリア語のバルク黙示録やマルコ 13 章やマタイ 24 章の小黙示録が書かれた。また、1 世紀末の小アジアにおいては、激化する迫害の状況の中で、キリスト教徒の間で黙示思想が再び強くなり、黙示的表象を駆使した言論活動がなされる現象が見られた。このことが恐らく、新約後期文書の一部（ヘブ 12: 21-29; II テサ 1: 3-12; 2: 1-11; II ペト 3: 8-13; 黙 1: 1-3; 1: 4-22: 7; 22: 8-20）に見られる強い黙示的傾向の背景をなしていると考えられる。

他方、時が過ぎるに従って、終末期待の切迫性は薄らいで行き、黙示

7 Vielhauer/Strecker, 2. 518; Hahn, 96-97.

8 J. Baumgarten, *Paulus und die Apokalyptik* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1975); J.C. Beker, *Paul the Apostle: The Triumph of God in Life and Thought* (Philadelphia: Fortress, 1980); J.L. Martin, "Apocalyptic Antinomies in Paul's Letter to the Galatians," *NTS* 31 (1985) 410-424; idem., *Galatians* (AB33A; New York: Doubleday, 1997) 97-105; J. Plevnik, *Paul and the Parousia: An Exegetical and Theological Investigation* (Peabody, MA: Hendrickson, 1997) を参照。

9 Plevnik, 96 を参照。

10 de Boer, 360-361; Hahn, 99-107.

的思考が後退する現象も認められる。例えば、ルカ文書（ルカによる福音書・使徒行伝）は、終末期待を決して放棄はしないものの（例えば、ルカ 12: 39-40; 17: 24; 21: 25-28; 使 17: 31 を参照）、終末が到来する前に長い教会の時代が存在すると考えて救済史の神学を構築した¹¹。

ヨハネによる福音書は、世の終わり到来し、究極的な裁きと救いが起こるといふ未来的終末論よりも、信じる者は、既に永遠の命を得、信じていない者は裁かれているといふ（ヨハ 3: 36; 5: 24; 11: 25）現在の終末論を強調している。ここでも黙示的思考は著しく後退している。

2. 黙示的箇所分析

(1) I テサ 4: 13-5: 11

I テサ 4: 13-5: 11 は、テサロニケ教会の信徒たちの質問に答えて、パウロが終末到来以前に死んだ信徒たちの終末時の運命について語った部分である。テサロニケ教会はパウロの開拓伝道によって生まれた教会であり（I テサ 1: 5-10; 2: 13-14; 使 17: 1-9）、信徒の大多数は回心した異邦人信徒であった（I テサ 1: 9-10; 2: 13-14）。パウロは開拓伝道の時に、テサロニケ人たちにキリスト教の基本を教え、異教の神々に仕えることから、天地の創造主なる生ける神に立ち返ることや（1: 9）、キリストの死からの復活と終わりの時における来臨（1: 10）について語っていたと推定される¹²。しかし、終わりの時にキリストを信じる者が甦ることや、キリストの来臨に際して起こる終末的出来事を具象的に描いて見せることはしていなかった。そこで、終末時が到来する前にこの世を去った信徒たちの運命について、テサロニケ人たちの間に不安が生じた。この照会に対してパウロは初代教会の伝承を引用しながら、安心するように語ったのがこの箇所であり、パウロの語り方は牧会的である¹³。パウロはキリストを死者の中から甦らせた神が、信徒たちを甦らせると述べ

-
- 11 H. Conzelmann, *Die Mitte der Zeit* (4. verbesserte und ergänzte Aufl.; Tübingen: Mohr, 1962) (ハンス・コンツェルマン著・田川建三訳『時の中心』新教出版社、1976年)を参照。
 - 12 拙稿「テサロニケにおけるパウロの伝道説教」『パウロの宣教』教文館、1998年、10-31頁を参照。
 - 13 J. Baumgarten, *Paulus und die Apokalyptik* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1975) 98 は、この部分の修辭的機能が Trost-funktion (慰めの機能) であるとする。

た後に (4: 14)、初代教会に起源する伝承 (4: 15「主の言葉」) を引用して、次のように述べる。

「大天使の命令が発せられ、神のラツパが鳴り響く中に、主が天から降って来ると、キリストにある死者がまず甦る。次に、私たち生存者も彼らと一緒に雲に乗って空中に挙げられ、空中で主にまみえ、そうして常に主と共にいることになる。」(Iテサ4: 16-17 私訳)

主の来臨の場面を視覚的に描くこの部分は、パウロ書簡の中でも最も黙示的な部分であるが、非常に簡潔に語られている¹⁴。パウロは、主の来臨の時にはまず死者が復活するのだから、生者に対して決して不利ではないということを強調している。パウロがテサロニケ伝道の時は、この伝承をテサロニケ人たちに伝えず、死者の運命についての照会があった時点で初めて知らせたということは、黙示的内容の伝承を信仰に入ってから間もない信徒たちに伝授するについて、彼が非常に慎重であったことを示している¹⁵。黙示的内容の伝承が信仰歴が浅い信徒たちの信仰を掻き乱したり、思弁を招くことがないようにとの配慮があったのであろう。

パウロが引用する主の来臨についての第二の伝承は、主の日は盗人のように予告なくやって来るのでいつも目を覚まし、備えているように勧める(5: 1-11)。パウロは両方の言葉伝承を引用するに当たって、「励まし合いなさい」という言葉(4: 18; 5: 11)で結んでいる。主の日がいつかやって来るかは誰にも分からないのであるから、その時期についてあれこれ詮索せず、常に備えているようにという勧めは、共観福音書伝承に並行している(マタ24: 36-44; マコ13: 32-37; ルカ12: 39-40)。

(2) Iコリ15: 20-58

第一コリント15章においてパウロは、主の復活顕現の事実についての信仰告白伝承(Iコリ15: 3-7)を引用した後に、終わりの時における死者の復活の教理が真理であることを論証しようとしている(15: 12-58)。論証部分には、主の来臨にあつて死者が復活する場面の記述(15: 23, 52)

14 Plevnik, 84-86.

15 Vielhauer/Strecker, 2.518-519も同趣旨。

と、キリストが敵対するあらゆる勢力を打ち倒して支配を確立し、国を神に引き渡す過程を描く記述 (15: 23-26) が含まれている。これらの記述は主の来臨の様を描く初代教会の黙示的伝承に依拠している。パウロがこのような論証を行った理由は、コリント教会の信徒の中に死者の復活を否定する議論が出て来たからである (15: 12)。パウロはコリント伝道の時には、キリストの十字架の宣教 (I コリ 1: 18; 2: 1-5) や、キリストの死と復活顕現の伝承 (15: 3-7) や、聖餐伝承 (11: 3-7) を伝えたが、終わりの時における主の来臨の場面を描く伝承を伝えることをしなかった¹⁶。彼は後に教会員の中に死者の復活を否定する者が出て来たときになって初めて、これらの黙示的伝承の内容を伝えたのであった。ここにも、黙示的伝承を信徒たちに伝えるにあたってのパウロの慎重な態度が表れている。パウロの思考の出発点はキリストの復活であり、主は初穂 (*ἀπαρχή*) として復活したのであり、死者の復活の希望の根拠であると述べる (15: 20)¹⁷。

死者の復活の体について、朽ちることのない霊の体に甦ると述べ (15: 42-49)、第二のアダムであるキリストの復活にその根拠を見ている (15: 45-49)。復活した死者の体の質についてパウロが考察しているのは、この箇所だけである。それは、パウロはこの主題を自発的に取り上げるのではなく、コリント人たちの懐疑的問い (15: 35) に答える便宜上、復活した死者の体の質についての見解を示すことが必要となったからである¹⁸。

(3) II コリ 12: 1-10

黙示家が天上へ上り、天上の世界や終末時に起こることについての特別な啓示を受けることは、黙示文学に登場する主要な要素の一つである¹⁹。パウロはこの箇所において自らが「14年前に第三の天にまで引き上

16 拙稿「パウロのガラテヤでの伝道説教」『パウロの宣教』教文館、1998年、58-59頁を参照。

17 Hahn, 103-104もこの点を重視する。

18 死者の復活の体をめぐるパウロの議論の詳細については、出村みや子「初期キリスト教の復活理解の変遷(1) オリゲネスの復活論におけるパウロの影響」『ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所年報』第22号(1999年)1-31頁を参照。

19 J.J. Collins, "Introduction: Towards the Morphology of a Genre,"

げられ」、特別な啓示を受けた経験を語っている(1-2節)。天上で彼は、「人が語ることが許されていない、表現不能な言葉を聞いた」のであった(4節)。これは確かに黙示的経験である。しかし、パウロはこの時の経験を他の黙示文学のように絵画的に詳細に描き出すことはせず、非常に簡潔に結果を記すに止めている²⁰。また、彼は天上への旅の臨場感を高めるために一人称で語ることをせず、淡々と三人称で語っている。パウロがこの特殊な体験に言及する理由は、むしろそのような特殊な体験を誇ることがないようにと、「肉のトゲ」が与えられていることにある(7節)。彼はそれを取り除いて下さるように主に祈ったのだが、答えは「私の恵みはあなたに対して十分である。力は弱さの内に成就される。」というものであった(8-9節)。ここにも、黙示的表象や幻視体験を表現するにあたってのパウロの慎重な態度が表れている。

(4) マコ 13: 1-36 (マタ 24: 1-51; ルカ 21: 5-38)

マルコによる福音書 13 章では、エルサレムの神殿崩壊の預言(マコ 13: 1-2)についての質問(13: 3-4)を機縁に、オリブ山でイエスが弟子たちだけに対して世の終わりに起こる一連の出来事を予告する講話を行っている²¹。黙示文学において、世の終わりの出来事を象徴する幻や喩えの意味を解釈天使が説き明かすことがしばしばあるが、ここではイエスが黙示的出来事の解説者の役割を演じている²²。この講話は、終末の前兆となる諸出来事について語る部分(13: 5-8)と、迫害に備える心構えを語る部分(13: 9-13)と、終末の時に起こる出来事を語る部分(13: 14-27)と、終末に備える心の備えについての勧めの部分(13: 28-37)からなる。

イエスによれば、終末の時が訪れる前には、地上に大きな混乱がある。メシア僭称者が現れて人々を惑わし、戦争が起こり、地震や飢饉のよう

Semeia 14 (1979) 15-18.

20 B. Heiningen, *Paulus als Visionär. Eine Religionsgeschichtliche Studie* (Freiburg: Herder, 1995) 242-261.

21 E. Brandenburger, *Markus 13 und die Apokalyptik* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984) 62 は、この部分を「黙示的な教育的対話」と呼ぶ。

22 Brandenburger, 98 は、イエスがここで「黙示的教師」として語っているとする。

な自然災害も起こる (13: 3-8)。これらの混乱は世の終わりそのものではなく、その前兆であり、終わりの時の到来のために不可欠な「産みの苦しみ」(13: 8)の時である。この期間にはキリスト教への迫害がなされ、宣教師たちが裁判にかけられるが、それは信仰の証をする時であり、福音がすべての人々に宣べ伝えられる(13: 9-13)。終わりの時の到来に際しては、かつてないような艱難が及び、破壊がなされると共に、偽預言者が登場し、人々を惑わす(13: 14-23)。最後に、天変地異が起こり、太陽や月は光を失い、星は落ちてしまうが(マコ 13: 24-25; イザ 13: 10; 34: 10)、力と栄光をもってメシアである人の子が雲に乗って到来し、天使たちを世界中に遣わして選民を集める(マコ 13: 26-27)。

終末の前兆となる諸出来事について語る部分(13: 5-8)と、終末の時に起こる出来事を語る部分(13: 14-27)は、イエスの講話の最も黙示的部分である。しかし、他の黙示文学の例からすると終末の出来事を語る部分は非常に簡略で、終末時の異常な出来事を絵画的に克明に描く関心は弱いという印象を受ける。終末の出来事を中心は、メシアである人の子の到来を語る部分(13: 26-27; さらに、マタ 24: 29-31; ルカ 21: 25-28を参照)である。人の子の来臨を描く黙示的言葉は、非常に簡潔な形であるが、他のマルコ伝承(マコ 8: 38 並行; 13: 62 並行)にも、Q伝承にも見られ(マタ 24: 27; ルカ 17: 24)、共観福音書伝承における黙示的言葉の中心主題となっている²³。世の終わりにメシアである人の子が天使たちを従えて到来することは、ダニ 7: 13-14 に遡る。ダニエル書 7章の文脈では、「人の子」とは集合人格と考えられ、イスラエル人たちを指しているが(ダニ 7: 15-18)、後のユダヤ教文献(エチ・エノ 37-71章)や、初期キリスト教はメシア的人物を指す称号として使用した。マコ 13: 24-27 が描く人の子の来臨の特色は、人の子が天使たちを遣わし

23 H.E. Tödt, *Der Menschensohn in der synoptischen Überlieferung* (Gütersloh: Mohn, 1959); A.J.B. Higgins, *The Son of Man in the Teaching of Jesus* (SNTSM 39; Cambridge: Cambridge University Press, 1980); B. Lindars, *Jesus Son of Man: A Fresh Examination of the Son of Man Sayings in the Gospels and in the Light of Recent Research* (Grand Rapids: Eerdmans, 1983); H. Geist, *Menschensohn und Gemeinde* (Würzburg: Echter, 1986); A. Yarbo Collins, *Cosmology and Eschatology in Jewish and Christian Apocalypticism* (Leiden: Brill, 1996) 139-158 を参照。

て選民を集めることを述べて、裁きよりも救いのトーンを強調していることであろう。

マコ 13: 28-37 において、イエスは終末の到来を待つ者の心構えについて語る²⁴。イエスはまず前兆となるしるしを見て、終末が近いことを知るように促す(13: 28-30)。しかし、終末がやって来る時点については、それを定めた神のみが知るのであって、天使たちも神の子であるイエス自身も知らないと言語(13: 31-33)。天使も神の子も知らないことについて思弁を巡らすのは無益であり、何時来ても良いように用意していることが大切であり、イエスは、「気を付け、目を覚ましていなさい」と繰り返し語る(13: 33, 37; さらに、マタ 24: 42-44; 25: 13; ルカ 12: 35-40; I テサ 5: 6)。終末の到来の時を予知することは出来ないので、いつも目を覚ましておられるようにという勧めは、パウロ(I テサ 5: 1-11) や、ディダケー(ディダケー16: 1) も伝えている。終末を待つ者に熱狂ではなく、覚醒を促すことは、初期キリスト教伝承に共通な態度であると言える²⁵。

(5) 黙 1: 1-22: 20

a. この作品は著者が読者に直接語り掛ける序言(1: 1-3)と結語(22: 8-20)が付けられ、その間に本文(1: 4-22: 7)が挟まれる形となっている。序言は「イエス・キリストの黙示(*ἀποκάλυψις*)」という表題的言葉(1: 1)によって始まり、神がまもなく起こる終末の出来事について、天使を通して著者であるヨハネに示した終末のヴィジョンが本書の内容であるとしている。本文の部分は、天上のキリストから小アジアの7つの教会の守護天使に宛てた書簡の形式で書かれた部分(1: 4-3: 22)と、ヨハネが目撃した終末のヴィジョンの内容を描く部分(4: 1-22: 5)とからなっている。このように、黙示録は文書全体が黙示的な性格を持つ唯一の新約文書である²⁶。

24 Brandenburger, 78-79, 125-147 もこの部分の勧告的性格を強調する。他方, J.J. Collins, "Introduction: Towards the Morphology of a Genre," *Semeia* 14 (1979) 8 は勧告的であることは、キリスト教黙示文学の一つの顕著な特色であると述べる。

25 Vielhauer/Strecker, 2. 527.

26 黙示録の文学類型が黙示文学であることについての詳しい議論は、

パトモス島で黙示を受領したとされている(1: 9)、著者として仮託されているヨハネが、例えば、ゼベダイの子ヨハネ(マコ1: 29 並行; 3: 17 並行; 5: 37 並行; 13: 3 並行; 14: 33 並行; 使1: 13; 3: 1, 3, 4, 11; 5: 37)のような実在の歴史的人物なのか、文学的な仮構上の人物なのかは不明である。しかし、本書はユダヤ教黙示文学のようにエノクやエズラといった遠い歴史上の人物に著者を仮託することはせず、同時代の教会指導者が黙示の受領者であり、作品の中の語り手であるとしている。

興味深いのは語り手自身がこの作品を読まれるべき「黙示(ἀποκάλυψις)」(1: 1)と呼ぶと同時に、聞かれるべき「預言の言葉(τοὺς λόγους τῆς προφητείας)」(1: 3; 22: 10)としている点である。批評的聖書学は、預言と黙示の間に概念的な区別を置き、前者が歴史の平面に留まる言説であるのに対して、後者が歴史の終わりについての言説であるとしているが、初代教会にはこのような概念上・言語上の区別は意識されていなかった²⁷。それは、共観福音書に保存されているQ資料の担い手たちが自らを預言活動に従事する預言者と考へつつも(Q6: 22-23)、世の終わりに関する黙示的言葉(Q12: 39-40; 12: 42-46; 12: 51-56; 13: 28-30; 17: 23-24, 26-27, 30, 34-35, 37; 19: 12-13, 15-26; 22: 28-30)を語った事情と並行している²⁸。黙示録が黙示であり、預言

Vielhauer/Streckler, 529-530; D.E. Aune, *Revelation* (3 vols. WBC 52A-C; Dallas: Word, 1997-1998) 1. lxx-xc; idem., "The Apocalypse of John and the Problem of Genre," *Semeia* 36 (1986) 65-96; D. Helholm, "The Problem of Apocalyptic Genre and the Apocalypse of John," *Semeia* 36 (1986) 13-64; B. Witherington II, *Revelation* (Cambridge: University Press, 2003) 32-40 を参照。

- 27 E. Schüssler Fiorenza, *The Book of Revelation: Justice and Judgment* (2nd ed.; Minneapolis: Fortress, 1998) 133-156; D. Frankfurter, "The Legacy of Jewish Apocalypses in Early Christianity: Regional Trajectories," in *The Apocalyptic Heritage in Early Christianity* (eds. J.C. VanderKam/W. Adler; Assen: Van Gorcum; Minneapolis: Fortress, 1996) 133-136; J.J. Collins, *Seers, Sybils and Sages in Hellenistic-Roman Judaism* (Leiden: Brill, 1997) 116-117; B. Witherington III, *Revelation* (Cambridge: University Press, 2003) 38; 拙稿「黙示録1: 4-3: 22の書簡論的考察: 両義性の文学的効果」『基督教論集』第46号(2003年)28-29頁を参照。

- 28 Q資料に出て来る語録の順序は、マタイによる福音書よりもルカによ

であるということは、この文書の内容が恍惚状態になって体験した天上のヴィジョン（黙1：9-11）であると同時に、読者（特に小アジアの7つの教会の信徒たち）に語り掛けた神の言葉であるという両義性を表している²⁹。

b. 黙4：1-22：5が描く黙示の内容（4：1-11 天上の宮廷・神殿と礼拝，5：1-8：5 巻物の七つの封印を解く，8：6-11：19 七人の天使が七つのラッパを吹く，12：1-13：18 天から落ちた竜と2匹の獣，14：1-15：8 小羊による贖い，神の裁きの時の到来の告知，16：1-18：24 大バビロン，大淫婦への裁き，19：1-20：15 勝利の歌，小羊の婚礼，千年王国，最後の審判，21：1-22：5 新天新地の創造，新しいエルサレムの到来）は多岐にわたるが、大きく言って天上の神殿・王宮での礼拝の主題と、終わりの時における、戦いと勝利，裁きと救済，新しい理想世界の到来といった主要主題が螺旋状に繰り返されていると言える。

c. この文書には、旧約聖書やユダヤ教黙示文学の影響が顕著である。例えば、天上の宮廷・神殿での礼拝の様を描くことは（黙4：1-5：14）、旧約聖書に遡る（詩148；イザ6：1-13；エゼ1：4-28）。このイメージがユダヤ教黙示文学に継承され発展した（死海写本『安息日の犠牲の歌』を見よ）³⁰。黙示録は天上の宮廷に、神の小羊であるキリストや（黙5：6-14；6：1，3，5，7，9，12；12：11；13：8；14：1-5；19：5-8；さらに、ヨハ1：29を参照）、召天した信徒である24人の長老や（黙4：4；7：11；14：3；19：4）、白い衣を着た殉教者の群を（7：9-17）登場させることによってキリスト教化している³¹。

る福音書の方が忠実に保存しているので、Qの章節の番号はルカによる福音書の章節の番号で表記している。例えば、Q6：22-23とは、ルカ6：22-23のことである。

- 29 Vielhauer/Strecker, 2. 515；拙稿「黙示録1：4-3：22の書簡論的考察：両義性の文学的効果」『基督教論集』第46号（2003年）31-34頁を参照。
- 30 拙稿「死海写本『安息日の犠牲の歌』（4QShirShabb；11QShirShabb；MasShirShabb）の天使論」『オリエント』第41号（1998年）65-77頁を参照。
- 31 詳細は、J.J. Collins, *Seers, Sybils and Sages in Hellenistic-Roman Judaism* (Leiden: Brill, 1997) 115-127を参照。

黙示録は発達した天使論を示す。天上の宮廷・神殿での礼拝において、天使達の群衆は神を讃美している（黙5：11-12；7：12；16：5-7；さらに、ルカ2：13を参照）。天使は神と人間の間をとりもって、神の告知を人間に伝える役割を果たす（黙1：1；5：2, 11；19：9, 17；また、マタ1：22, 24；2：13, 19；ルカ1：11, 13, 18, 19, 26, 28；2：9, 10も参照）。さらに、天使は神の意志の執行者として地上に裁きを行う（黙8：1-11；19；14：14-18；24；20：1-3）。特に、大天使のミカエルは他の天使たちを従えて、天上で悪魔の化身である竜とその手下たちと戦ってうち破り、地上に追い落としている（黙12：7-12）。大天使ミカエルは、ダニエル書でも終末の救いをもたらす決定的役割を与えられている（ダニ12：1-3）。また、死海文書の『戦いの書（1QM）』では、終末時に大天使ミカエルに率いられた光の子らと、悪魔的存在であるペリアルに率いられた闇の子らとの宇宙的戦いが描かれている。

黙示録は、地中海世界全体を支配するローマ帝国の権力を獣に喩えている（黙13：1-10, 11-18；13：12-15）。これはアレクサンドロスの帝国やその後継者たちの帝国を獣に喩えたダニエル書の影響であろう（ダニ7：1-14を参照）³²。新約聖書は全体として見ると、当時の支配権力であるローマ帝国に対して必ずしも敵対的ではない。例えば、使徒パウロはローマの権力を、神によって治安維持のために立てられた「上に立つ権威」として理解し、信徒たちに服従を勧めている（ロマ13：1-7）。しかし、ローマ帝国が託された治安維持という委託を越えて、権力を濫用すると、傲り高ぶって市民たちを収奪し、神を冒瀆して信徒たちを迫害する「獣」と化する（黙13：1-10, 11-18）。黙示録は、紀元90年代の中葉に書かれたと推定されている³³。この時代はローマ帝国が、キリスト教に対する寛容

32 D.E. Aune, *Revelation* (3 vols. WBC 52A-C. Dallas: Word Books, 1997-98) 2. 732-733; A. Yarbo Collins, "The Book of Revelation," in *The Encyclopedia of Apocalypticism* (ed. J.J. Collins; 3 vols; New York: Continuum, 1998) 1. 394-395.

33 R.H. Charles, *A Critical and Exegetical Commentary on the Revelation of St. John* (ICC; Edinburgh: T & T Clark, 1920) 1. xcix-cvii; A. Yarbo Collins, "Dating the Apocalypse of John," *BR* 26 (1981) 41-43; U. Schnelle, *Einleitung in das Neue Testament* (4. Aufl; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2002) 562-563; 拙著『新約聖書概説』教文館, 2004年, 182頁を参照。これに対して, A.A. Bell, "The Date of John's Apocalypse," *NTS* 25 (1979) 93-102;

さを失い、迫害を加えた時に当たっていた³⁴。

d. ローマはさらに裁かるべき「大淫婦」(黙 17: 1-18)、墮落の限りを尽くす「大バビロン」(17: 5; 18: 2, 10, 21)と呼ばれ、徹頭徹尾否定的に描かれている。栄華を誇り、贅を尽くし、信徒たちの血を流した「大バビロン」であるローマに対して、世の終わりの裁きが下り、ローマは滅びることが天使によって宣告され(18: 1-24)、天上では勝利の祝いがなされる(19: 1-4)。終末における運命の逆転が語られ、現在は苦難の中にある信徒たちは、神の小羊であるキリストの最終的勝利に参加する(17: 13-14)。かくして、信徒たちの苦難と忍耐は終末時の審判の時に報われることになる。これは迫害の中で苦しんでいる信徒たちには希望を与え、苦難に耐える力を与えることになる。宗教的観念が支配権力に対する報復を先取りし、苦難に対する心理的代償を与えるのである³⁵。

e. 旧約聖書の預言は、神が来たらせる将来の理想状態を詩的なイメージで描く(例えば、イザ 2: 1-5; 11: 1-10; エゼ 43: 1-47: 12)。黙示文学は歴史を越えた彼方に、理想状態を待望する。黙示録は、最終的救いは現在の世界の中にはなく、世の終わりに到来する新天新地の中にあると主張する(黙 21: 1-8; さらに、イザ 66: 22 を参照)。それは、神が直接に人間と共に住む世界であり、「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」(黙 21: 4)。これは、旧約聖書の冒頭にある天地の創造の記事を踏まえ(創 1: 1-2: 4a; 2: 4b-25)、世の終わりにおける神の世界の再創造、世界の更新について語っている。聖書は天地の創造を語る創世記で始まり、新天新地の創造を語る黙示録で終わる。

J.C. Wilson, "The Problem of Domitianic Date of Revelation," *NTS* 39 (1993) 587-605 は、本書の成立年代を、60年代の皇帝ネロによる迫害の時代としている。尚、D.E. Aune, *Revelation* (3 vols. WBC 52A-C; Dallas: Word Books, 1997-1998) 1. lviii-lxxx は折衷的な立場を取り、本書の最終形態は90年代に完成したが、含まれている資料の一部は60年代に遡るとしている。

34 Yarbo Collins, 1. 396-397.

35 Vielhauer/Strecker, "Apokalypsen und Verwandtes," *Neutestamentliche Apokryphen* (ed. W. Schneemelcher; 5. Aufl.; 2 vols; Tübingen: Mohr, 1989) 2. 499.

ユダヤの都エルサレムとその中心にあった神殿は、紀元 66～70 年のユダヤ戦争で破壊されていた。黙示録は、新天新地の創造に当たって、エルサレムも復興することを待ち望んでいる。終わりの時には、「エルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下ってくる」とする (21: 2, 10)。新しいエルサレムの中央に神と小羊キリストが住むため、もはや神殿はなく、神の光が照らすので、もはや夜はない (21: 22-22: 5)。神と小羊の玉座からは命の水が流れ出て都を潤している (22: 1-2, 17)。命の水の川の畔には命の木があって毎月実を稔らせている (22: 2)。これは、創世記のエデンの園から川が流れ出て、世界を潤しているイメージを新天新地のエルサレムに当て嵌めたものである (創 2: 10-14 を参照)。預言書のエゼキエル書は、エルサレムが廃墟の状態にあったバビロン捕囚期の中で、理想の神殿の再建を預言した (エゼ 43: 1-47: 12)。この理想の神殿からも水が湧き出して、世界を潤している (エゼ 47: 1-12)。黙示録にはエゼキエルの預言の影響も明らかに見られる。

3. 結論：新約聖書の黙示文学・黙示思想の特色

(1) キリスト教黙示文学は、ユダヤ教黙示文学を継承し、キリスト教化したものである³⁶。初代教会が、黙示文学をキリスト教化する時は、特に終末の時に到来するメシアの来臨を、復活高挙した主イエス・キリストの来臨と解釈することが要となる (マタ 10: 23; 12: 41; 24: 29-31; 26: 64; マコ 13: 24-27; 14: 62; ルカ 22: 25-27; 22: 69; 使 17: 31; I コリ 15: 20-58; I テサ 4: 13-5: 11; II テサ 1: 3-12; 2: 1-11; II ペト 3: 8-13)。また、キリストの来臨の時は、死者の復活する時であり (I テサ 4: 13-25; 黙 20: 11-15)、その証拠はキリストの甦りであるとされている (I コリ 15: 20-58; 黙 1: 5)。新約聖書の黙示的ヴィジョンの中で死者の復活の希望が占める位置は大きい。

(2) ユダヤ教黙示文学の一つの特色は偽名性にあり、エノクやモーセやエズラなど遠い歴史上の人物を著者に仮託して創作がなされている。

36 Vielhauer/Strecker, 2. 506-507.

これは書かれた内容に権威と信憑性を持たせるための文学的意匠である。これに対して、新約聖書の黙示的伝承の多くは、遠い歴史上の人物でなくイエスが語った言葉として伝えられている（マタ 10: 23; 12: 41; 24: 1-51; 26: 64; マコ 13: 1-36; 14: 62; ルカ 21: 5-38; 22: 69; I テサ 4: 13-5: 11)。これは、黙示的伝承を初代教会の預言者が、「主の言葉」として語った事情に由来している。他方、黙示録は長老ヨハネが見た黙示・預言として、実名で語られている。これは黙示録が黙示であると共に預言である二重性に由来するのであろう。

(3) 新約聖書の黙示的言説は、黙示録を別にすれば、ユダヤ教黙示文学と比べると天上の出来事や、世の終わりの出来事について視覚的に語ることや、終末の時が何時来るのかと詮索することについては抑制的である。これは、世の終わりという究極的未来を見た者はない以上、終末の様について想像力を行使して思いめぐらすことが思弁に陥る危険があったためであろう。新約聖書の言説は総体として思弁的と言うよりは勧告的であり、熱狂的にならず、醒めており、終末が何時来ても良いように備えていることを強調している（マコ 13: 28-37; I テサ 5: 1-11)。

(4) 文書全体が黙示的表象によって構成される黙示録は、新約聖書の中では例外的である。これは、皇帝礼拝とキリスト教迫害が強まった1世紀末の小アジアの状況の影響が強いと考えられる。ローマ帝国という当時の地上世界では絶対的であった権力を打倒し、理想世界を実現する勢力は当時の地中海世界には存在しなかった。この世界秩序を終わらせ、新しい世界を到来させ、敬虔な信徒を永遠の救いと幸いへと導くには、専ら、超越的神の意志の執行者である天上のキリストや天使の力による他はないと考えられたのである。

黙示文学の多くは、厳しい迫害下の世界に生まれている。例えば、黙示文学のダニエル書は、紀元前2世紀中葉、セレウコス朝シリアのアンティオコス4世の強引なヘレニズム政策によって引き起こされた、パレスチナにおけるユダヤ教迫害下に書かれた。現在の世界は悪の権化のような異邦人帝国によって支配され、ユダヤ教の宗教的伝統に忠実に歩む敬虔な人々は、迫害されて殉教しているが(I マカ 1-2章; II マカ 7章を

研究フォーラム

参照), 最後には, 神の使者による世界の審判が行われ, 敬虔な善人は復活して永遠の命に入り, 悪を行っていた者たちは永遠の裁きに陥るとい
う確信は(ダニ 12: 1-3), 敬虔な信仰者たちに現在の世界を超える希望
を与えた。